



雄飛

校訓

考える人 心豊かな人 たくましい人

霧島市立国分南中学校

学校便り 1月2号

令和8年1月30日発行

現実が、夢や目標を超える

校長 平國弘明(ひらくに こうめい)

令和8年、2026年が始まり、1か月が過ぎた。今年は、みなさんにとってどんな年になるだろうか。日本においては、早速、衆議院議員選挙が行われることになった。結果により、いくつかのシナリオが描かれている。政治家の皆さんには、将来を見据えた日本の舵取りを期待する。また、有権者がこのことに無関心でいては、損をする。各政党や候補者がどのような政策で、日本のさらなる発展や活性化、安定化を図ろうとしているのか、皆さんも注目しておこう。

さて、話は変わるが、今年のNHK大河ドラマは「豊臣兄弟！」。豊臣秀吉の弟、豊臣秀長を主役とする作品であり、足軽の子から天下人へと駆け上がった豊臣兄弟の活躍を描いている。歴史上の人物として名が知れ渡っているのは、兄の秀吉。この秀吉にまつわる話を聞く機会があった。

講師は、福岡在住の歴史エッセイニスト、白駒妃登美(しらこまひとみ)さん。その講演の中で「天命追求型」の生き方について、ふれられた。その代表として、豊臣秀吉が挙げられるという。秀吉と言えば、「天下統一」を成し遂げ、織田信長、徳川家康とともに戦国武将として歴史に名を残す人物だが、秀吉は信長、家康とは大きく異なる点があるという。それは信長、家康の父親はいずれも殿様。一方、秀吉は農民の子とされており、少なくとも名の通った家柄ではない。そんな秀吉が天下人になろうなどと最初から考えていただろうか。通説では、「侍になるために織田家の門を叩いた」と言われている。最初は、信長に「小物(こもの)」という雑用係で仕え、ある寒い日の朝、草履を懐で温めてから、信長に渡したという有名な話は、皆さんも聞いたことがあるのではないだろうか。白駒さんは、「(秀吉は)農民の子である自分に目をかけてもらえたことに感謝し、雑用係でも工夫できることを行っただのだと思います。やがて足軽(身分は農民)となってからも信長を喜ばせたいという思いは変わらず、一層の信頼を得て、やがて侍に取り立てられます。その後も侍大将、城主、大名と上り詰めるのです。ではなぜ、秀吉は“侍になりたい”という夢を越えることができたのか。想像するに、秀吉は最初から天下取りなど考えず、いつも“いま、ここ”に全力投球する生き方を貫いたからだと思います。自分の身の回りの人たちに喜んでもらうことを精一杯やっていた。その結果、周囲の応援を得て次々と人生の扉が開き、天下人へと運ばれていったのではないのでしょうか。まさに天命追求型の人生だったのです。」と熱く語られた。郷土の英雄、西郷隆盛もこのタイプの人物ではないかということだった。また、この生き方に、ご自分の体験も重ねられていた。16年ほど前に大病を煩っていることがわかり、治療。完治したかに思えたが2年後再発。塞ぎ込む日々。あるとき、見舞いに来た友人の言葉に気付きを得、目標を追いかけていた生活から「今を受け入れ、この瞬間に最善を尽くし、天命に運ばれていく」という「天命追求型」の生き方にシフト、家族、友人、食事など日常のすべてことに感謝する日々となり、いつしか体のあちこちにできていたすべての病巣も消え、今でも、再発の兆候はないと笑顔でお話くださった。

これから、ますます、先行き不透明、何が起こるか分からないと言われる。また、中には、なかなか夢や目標が持てないという人もあろう。そんなときには、秀吉のように誰かを喜ばそうと、“いま、ここ”に全力投球してみてもはどうだろうか。



株式会社ことほぎ 代表取締役
白駒妃登美氏【同社HPより】

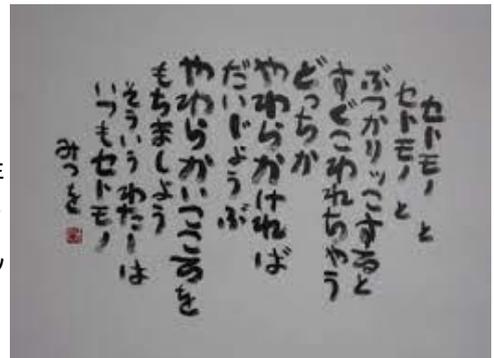
参考:「1日1話、読めば心が熱くなる365人の仕事の教科書」致知出版社、(株)ことほぎ HP

相手の気持ちを理解していますか？自分の気持ちをきちんと伝えていますか？

「あんなこと、言わなきゃよかった。」「なんでそんな言い方をするんだろう？」という気持ちになったり、ついつい言い過ぎてしまったり、相手の心境も考えないまま、事実を確認しないまま、自分の思い込みや勝手な解釈で言ってしまう……。互いに嫌な気持ちになり、どうにかしないと？と思いながら、言い出せずにいるというような状況はないだろうか。

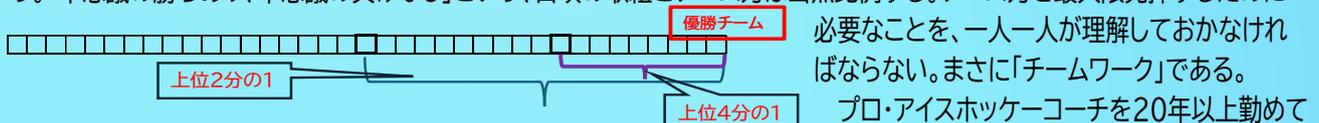
私たちは同じ国分南中に所属していても、その多くは他人どうし。少しずつ違う環境で育ってきているので、意見や考え方の違いがあるのは当然である。ただ、そのときの対応の仕方によっては、前記のようなことが生じる場合がある。発する態度や言葉、言い方で随分と印象は違うものである。相手や周りへ一方的な主張をすれば、双方気分はよくないし、関係に亀裂が生じる場合もある。独りよがりになる、「自己中(自己中心的)」にならないためにも、昔から言われるように“相手の立場に立って”“周りをよく観て”が大切である。

その意見、「自分のために言っていないか」、「みんなのために言っているのか」、「傷つく人はいないのか」、「他者が理解できるものなのか」など考える必要がある。そして、場合によっては、自分の非を認め、過まることや、自分が受けた誹謗や非礼を“赦(ゆる)す”ことで、互いに気持ちよく、みんなが楽しくなるのではないと思うがどうだろうか。右は、相田みつをさんの有名な詩である。互いに自分の主張を譲らなければ、セトモノ(瀬戸物、一般的に焼き物と同義語)どうしがぶつかったときのように、互いに傷ついてしまう。どちらかが柔らか(物で言えば材質、人で言えば物腰や心)であれば、互いに傷つくようなこともない。この柔らかさは、トラブルが降りかかってきたときのレジリエンス(回復力や回避する力)にもつながることである。



勝てるチーム・組織とは？

秋からこの1月にかけて、いくつか部活動の新人戦を観戦することができた。新チームになり、5、6か月(ちなみに令和8年度地区総体まで、あと5か月半となっている)を経て、技術的な成長を感じた。日々の練習を観ていても、そのことがわかる。とは言え、大会に参加すれば、どうしても勝ち負けがついてしまう。では、勝てるチームは何が違うのか。これらの大会は出場チーム数も多いため、一般にトーナメントで行われている。つまりは、「負ければ終わり」ということである。大会に100チーム参加したとしよう。1回戦が終わった時点でチーム数は半分になる(実際の組み合わせでは、100チーム参加の場合、1回戦は、32の対戦。残りの46チームは2回戦から登場する)。つまり、理論上は、出場チームの半分より上位の力を持つチームでないと1回戦を勝てないということになる。2回戦は、初めのチーム数の半分の半分が残るので、全チームの4分の1より上位のチームしか残らないことになる。こうして考えていくと、ベスト8、ベスト4に入るには、どれくらいの力が必要なのか客観的に見えてくると思う。「不思議の勝ちあり、不思議の負けなし」という、日頃の取組とチーム力は当然比例する。チーム力を最大限発揮するために



必要なことを、一人一人が理解しておかなければならない。まさに「チームワーク」である。

プロ・アイスホッケーコーチを20年以上勤めていらっしゃる若林弘紀さんは、企業セミナーの中でチーム力を発揮するポイントを4つ挙げられている。①役割の定義、②役割の練習、③役割に対する正当な評価、④役割に適した人事、である。このことをもう少しわかりやすく考えてみよう。①役割の定義とは、個々の役割・ポジションを明確にすること。②役割の練習とは、想定される場面での自分や他の人の動きを文字通り練習すること。③役割に対する正当な評価、試合や練習を振り返り、練習してきた動きができていたかどうかを見極めること。上級生だけでもしくは下級生だけ、一部の人が失敗を指摘されることはない、ということ。④役割に適した人事、チーム全体を考えたときに、それぞれに合ったポジションが割り振られている。もしくは合うようにポジションが見直されているということ。

それぞれが勝手な動きをせず、それぞれの役割をしっかりと理解し、その役割を意識しつつ繰り返し練習し、経験や学年に関係なく、正しく評価し合い、各々の能力や力量を考えて、役割が決まっている。加えて、②に関係するが、試合のさまざまな場面を想定した練習ができていないか。勝っているのか、負けているのか、並行カウントなのかなど状況に応じて、準備すべきことは変わる。技術だけでなく、場面に応じた対応力を磨く必要がある。

参考:創業手帳HP